

“札建協法”で橋梁点検

札幌建設業協会と共に、近接目視でコンクリート橋梁全体のダメージを推測できる橋梁の点検・補修マニュアルを作成した北大大学院の佐藤靖彦准教授が、市町村が管理する4橋でひび割れなどの劣化を測定した。損傷具合を数値化した結果は各市町村に提出するほか、2015年3月の報告会で発表する。

「構造性能に立脚したコンクリート橋梁の合理的な点検診断法」で、通称は“札建協法”。佐藤准



教授は「橋梁の点検・補修に係わる研究会」座長を務め、マニュアルを1年半余りかけて、ことし3月にまとめた。

国土交通省は、一定規模以上の橋梁やトンネルは5年に1度の定期点検を義務付けている。自治

体は財政難に陥るとともに橋梁の老朽化が深刻化する中、簡易な近接目視でひび割れなどの材料損傷から、橋梁全体のダメージ

を把握し、補修の優先順位を付ける効果的なマニュアルであること

ひび割れなど損傷数値化

北大の佐藤准教授ら 来年3月に報告会

「シ」を知ることができる手法として考案した。

劣化測定は、札幌市と厚真町、当別町内にある老朽化した4橋を対象に実施。佐藤准教授と同大学院工学部4年の高沢優人さんが各橋を回り、タブレットPC端末を操作し、ひび割れの大きさや位置などが記録できる点検口ポットカメラを用いて診断した。

4日に最後となる当別町の32線橋を点検診断した佐藤准教授は「財政負担を考えれば、補修するかしないかの判断材料にできる意味は大きい」と合理的な手法であること

を強調。さらに「従来のマニュアルによる結果と比較し、札建協法の有効性を実感してもらいたい」と話している。

15年3月には、札幌建設業協会が測定結果の報告会を開く。市町村への普及に向け、国や道の補助金申請が伴うマニュアルとの差別化を図り、老朽化の優先順位を付ける効果的なマニュアルであること